
方向音痴と存在感無し

橘 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

方向音痴と存在感無し

【Nコード】

N4907Y

【作者名】

橘 潤

【あらすじ】

方向音痴の少女と、存在感が無さ過ぎる少年のラブコメディ！
ラブが無さそうなのは気のせいです！

1st Day - 1 迷子の二人

春といえば連想するのは大体の人が桜だろう。だけど、四月には一部の地域の桜はほとんど散っていて、春という雰囲気はほとんどない。

次に思い浮かぶのは、学生だったら入学式や始業式、クラス替えだ。

彼女、宮坂詩織は今日から高校生だ。

上を見ればどんより曇った空。まるで彼女の今の心境を表しているみたいに。

「……………迷った」

迷っている場所は学校へ行く道ではなく、学校の敷地内だ。金持ち学校だからかなり広く、校門から校舎まで徒歩十分は掛かる。一本道ならまだマシだが、問題なのは分かれ道が多すぎる事と、木が多くて校舎が見えないからだ。

この学校——『私立岬ヶ丘高校』では、入学式直前にクラスを決める。理由は、受かった生徒が春休み中に予習復習をしてるかどうかが調べ、学力でクラスを決定するからだ。クラスは、頭が良い順にA～Eまで五つある。クラスごとに勉強の仕方が代わるわけではないが、部屋が微妙に違う。Aクラスはほとんど真新しいのに対して、Eクラスは壁に落書きがあって汚い。

分かれ道が多いのは問題の書いてある看板を立てたりし、二択から四択の中から選ばせるためだ。これには更に理由があり、周りの人と相談し、友達を作りやすくするためだ。

こういうお金持ち学校にはプライドの高い生徒もあり、そのせいか、友達が誰一人出来ない事がある。こんな事をしても、その性格が直るかは分からないが、少しでも良い方向に変わっていった欲しいという、学校側の考えだ。

分かれ道は広めの道ばかりなのだが、時々小道がある。広い道

を通っていけば迷わずに済むのだが、時々小道に入っていつてしま
う生徒が居て、毎年迷子になる生徒が数名いる。その生徒達は全員
方向音痴なのだが。

迷ったらその場で待機が一番良いのだが、一度迷ったら三時間は
待たないと先生達が来てくれないため、ほとんどの人は自力で脱出
を試みる。無事校舎に辿り着けるのは、その内の三分の一。残りは
見つけてもらうまで待っている人か、校舎を素通りして更に迷う人
だ。

「ここは一体どこなの？」

視界に入るのは花と草と木だけ。林の中にぽつかりと、きれいに
出来た円い空間。人口でも、ここまでキレイな円を林の中に作るの
は大変だ。

迷って一時間。歩くのも疲れ、その場に腰を下ろした。

微風が草木を揺らす音だけが耳に入る。驚くほど静かな空間。こ
こまで静かなのは寝る時以外はテストの時しかなかった。今と違う
のは、寝る時もテストの時もちゃんと理由があった。

寝る時は音楽を掛けると眠れなくなるから、何もつけないでいる。
受験の時は静かにしなくちゃカンニングとみなされ、教室を追い
出されてしまう上に、全教科ゼロ点だ。

でも、今は違う。迷って見つけてもらうのを、ジッと座って待つ
しかない。

携帯や音楽機器、本はクラス分けテストがあるから持って来ちゃ
いけなかった。

最初に校門で荷物やポケットのものを調べられるのだが、過去に
ばれずにテストを受けた者がいて、教室内で使ったのがばれてE
クラスにされたらしい。その人は特に気にしていなかったそうだ。

相談はありなのに、辞書の類は持ち込み禁止とは、変わった学校
である。

「暇ー！」

大声で不満をぶちまけた。やる事がなくて暇すぎる。

声に出した後、誰かに聞かれてないか心配になって周囲を見渡すが、誰も居ない。

「ホント、暇だね」

誰も居ない事を確認してホッと息を吐いた瞬間、男性の声が聞こえた。

教職員や保護者は校舎に集まっているため、この場所に居る事は絶対にない。在校生も各々のクラスに居るため、この場所に居る者は必然と絞る事が出来る。同じ新入生で、迷子だ。

聞かれてた事が恥ずかしくなり、顔が赤く染まる。

振り返ると、茶髪で前髪は目より少し上、後ろは少し長い、あまり気にならない程度。瞳の色は髪より濃いダークブラウンで、顔はかなり整っていてイケメンだ。

「い、何時からいたの？」

「ん？ キミが『迷った』って言った時からその木の所に」

少年が指差した所は、ギリギリ詩織から見える位置。

二度も見渡したのに気付かなかった。

「俺の前を堂々と通って行ったから、気付いてるのかと思った」

「それって、貴方の存在感が薄すぎるだけじゃないの？」

最初から声を掛けてくれれば、恥ずかしい思いをしなかったのに
と思い、本人が気にしていそうな事を口にした。

だが、少年は特に気にする風でもなく、「そうだよ」と言った。

この年で誰もが気にする事を考え、思いついた言葉を発した。

「貴方も迷子？」

「うん」

少年の素っ気ない返事で会話が続けられず、気まずくなる。だが、少年は気にしていなかった。

「わ、私も迷子なの…」

何とか笑顔で会話を続けようとするが、頬が引き攣ってる。

「さっき、『迷った』って言ってたから、分かるよ」

少年は冷静すぎた。詩織が相手も気まずいんだろうな、と思って

会話を続けようとしたのに、すぐに終わらせるような返事をする。気まずい。気にしすぎだと分かっているけど詩織には耐えられなかった。

ポツポツと、雨が降り出した。

「木の下に移動しようか」

少年の声に、詩織は小さく頷いた。

木の下では、全く雨に濡れなかった。木々が密集していて、木の葉が雨粒を受け止めているからだ。それでも、時間が経てば溜まった雨水が一気に落ちてくる。雨がすぐに止めばいいと思うが、今朝の天気予報では一日中雨だ。

二人で先生が探しに来るのを待つより、学校の校舎に向かったほうがよさそうだ。

「ねエ……」

少年が、小さな声で呼びかけてきた、詩織は少年の顔を見て少しだけ首を傾げ、次の言葉を待つ。

「君の名前、教えて」

「宮坂詩織」

「宮坂さんね。俺は片岸陸。同じEクラスだからよろしくね」

「え？」

少年——陸の言った最後の方の言葉に、詩織は疑問の声を口にした。

「もしかして……知らない？」

「何が？」

陸の問いに問いで返す。陸は頭を抱えたため息を吐いた。「学校案内、ちゃんと読んだ？」

1st Day - 1 迷子の二人（後書き）

文章がまだあまり上手くないから、余計なものの描写が入っているかも。

なるべく少女の思考を書いているんですけどね。

1st Day - 2 着いた場所は……校舎？（前書き）

遅くなりました><

まあ、いろいろあるわけだね（苦笑）

全開より1000文字以上短いです。

今後はこのくらいの文字数で早く更新出来るようにしていきたいと思っています。

1st Day - 2 着いた場所は……校舎？

詩織は首を横に振って答えた。学校案内とか読むのが面倒だったから、すぐにゴミ箱に捨てた。

それを聞いた陸は、深いため息を吐いた。

「な、何でため息吐くの？」

「何でもないよ」

そう答えて陸は上を見上げた。

「ここにずっと居ても絶対濡れないわけじゃないし、校門か校舎目指そうか」

「ちよつと待つてよ。道分かるの？」

「テキストに歩いてたら舗装された道にくらい出るでしょ」

陸の言ってる事は分かるが、詩織は高校のクラス分けテストが始まって、五分もしないうちに迷っている。

更には、迷ってから舗装された道を見る事無くここまで来た。

確実に道に出る方法は、真直ぐ進む事。だが、周りを木で囲まれている場所では真直ぐ進み続けるのは難しい。

「ここで待つてても意味ないし、行こ」

「うん」

先を進む陸の後をついていく。だが、暫く歩いて陸の姿を見失った。

辺りを見渡すが、どこにも居ない。完全にはぐれた。そう思った時、急に後ろから陸に声を掛けられた。

「どこ見てんの？」

「きゃあっ！」

突然背後から声を掛けられ、驚いた拍子に持っていた鞆で殴ってしまった。

鞆はキレイに陸の頬を叩き、陸はそのまま尻餅をついた。叩かれて少し赤くなってる頬を擦りながら立ち上がる。

「び、ビックリしたあ……！」

「ビックリしたのはこっちだよ」

「ご、ごめん」

「ま、いいけどさ。行くよ」

再び歩き出した陸の後ろをついていく。だが、また暫くすると陸の姿を見失ってしまった。

辺りを探してもどこにもいない。完全にはぐれた。今回は間違いなく。仕方なく一人で進み続けると、通り道に出る事が出来た。木陰の下から出ないように、道なりに進み続ける。だが、暫くすると……、

「ここ、どこ？」

また迷ってしまった。今度は本当に誰も居ない。一人ぼっち。

周りを木で囲まれていると、ここが本当に学校の敷地なのかと不安になってくる。だが目の前には、古い立派な建物がある。おそらく旧校舎だろう。幸い、玄関の所に屋根があるから雨宿りできる。走ってそこまで行き、玄関を背に寄りかかると急にドアが開いた。そのまま倒れると思ったが、誰かが受け止めた。その人物の顔は、今日何度も見ているもので、どうしてここに居るのか問いただしたくなったが、先にお礼を言った。「ありがとう」

「どういたしまして」

陸は静かにそう言った。

「ねえ、どうしてここに居るの？」

「真直ぐ歩いてたら急にキミが消えてさ、探してたらここに着いた。キミは？」

「私は陸君と逸れたから一人で校舎に行こうと歩いてたら道に出ただけで、暫く道なりに歩いてたらいつの間にか周りを木で囲まれてて……」

「つまり、筋金入りの方向音痴と」

「うっ……そ、そうだけど、そんなはつきりと言わなくてもいいじゃん！」

顔が羞恥と怒りで赤くなる。

この年で迷子というだけでも恥ずかしいのに、一番気にしている事をはっきり言われたのが嫌！

「ま、その方向音痴が今回はいい方向に働いたね」

「どういう事？」

詩織の問いに、小さく笑ってから口を開いた。

「ここがEクラス専用の校舎だから」

1st Day - 2 着いた場所は……校舎？（後書き）

感想お待ちします♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4907y/>

方向音痴と存在感無し

2011年12月3日21時54分発行